



本居宣長 篇3

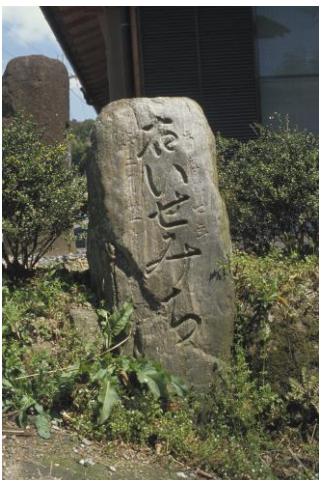
伊勢本街道を歩く

宣長ら一行は、多武峰、吉野、飛鳥などを巡り、明和9年（1772）3月12日に萩原へ戻ってきました。往路の3月6日に泊まった同じ旅籠に宿をとりました。『菅笠日記（すががさのにつき）』には、旅籠名が書かれていないので、残念ながら、どの旅籠に泊まったかは、わかっていません。

翌13日、一行は、萩原から松坂への帰りは、道を変えて、まだ歩いたことがない「赤羽根（あかばね）越え」ともいわれている少々険しい道を帰ることにしました。街道の分岐点・札の辻（ふだのつじ）から、まだ見たことのない「伊勢本街道」を歩きはじめました。

榛原と室生との境である石割峠を越え、田口、黒岩、山粕、桃俣、菅野をひたすら歩きました。この日は、多気まで行く予定でしたが、雨がひどく降り、風も激しいので、その手前の石名原（いしなはら／三重県津市美杉町）での宿泊となりました。翌日の14日には、松坂の自宅へ戻り、10日間の大和への旅が終わりました。

自宅の「鈴屋（すずのや）」は、松坂城内（三重県松阪市殿町）に移築され、現在は「国特別史跡 本居宣長旧宅」として公開されています。また、近くには「本居宣長記念館」があり、宣長の関係史料が収蔵・展示されています。



赤埴の道標

